

# シュッツはデューイ『論理学』をどう読んだか

木村 正人

かつてA・シュッツの伝記を著した彼の直弟子ヴァーグナーは、生前その拡張版を準備し、ついに公刊することのなかった膨大な草稿のなかで次のように述べている。「シュッツはアメリカの思想家たちに関する彼の最初の研究をジェームズとデューイに捧げたが、ともすると彼はデューイとジェームズのあいだに、自分とその（師）フッサールとのあいだに見られるのと類似した関係を見ていたのかもしれない」(Wagner, o.J., Chap. 27 A)。

シュッツはたしかにフッサールから現象学を学びつつも、終始自らの関心をすでに内世界的に成立している間主観性に向け、方法的独我論を介した超越論的現象学ではなく、「一般社会学」としての自然的態度の現象学に定位していた。デューイもまたプラグマティズムの先達ジェームズから決定的な影響を受けつつ、その記述心理学および個人主義的・知覚的アプローチからは離れて、習慣や探究の概念を軸に独自のプラグマティックな社会的行為論を展開していた。シュッツとプラグマティズムとの関係を取りざたす際、渡米後のシュッツが「現象学のアメリカにおける係留」として論じたジェー

ムズに言及が及ぶことが多いが、彼はジェームズの意識論に一定の敬意を払いつつも、デューイの社会的行為論や探究の論理学に見出されるようなプラグマティズムの別の側面に絶えず魅了されていたように思われる。

シュッツの生前の草稿を含む全集が、最近になってようやくドイツで刊行され始めた。現象学的社会学の祖として二十世紀社会学の主要な潮流のひとつをつくりだした彼の知的履歴は、そうした草稿や未公開資料をもとに再び捉え直される必要がある。現象学者シュッツとアメリカ思想プラグマティズムとの関わりもまた、この種の関心の高まりを頼みとして、今こそとりあげられるべき主題のひとつであるが、上のような相関関係を考慮するならシュッツとデューイの関わりがとりわけ気がかかりである。ここでは、シュッツの生前の蔵書に書き込まれた三つのメモを手がかりとして、亡命後の彼がアメリカ思想を受容していくに際し、とりわけデューイの名著『論理学』(Dewey 1938)をどう読みこみ、そこにいかなる重要性を見ていたのかを明らかにしていく。

## 一・シュッツとデューイ

ヴァーグナーが推測するとおり、シュッツはすでにシェーラーの

著作などを通じて、実践的経験についてのデューイの議論について間接的には知っていたはずであるが、彼がデューイの理論に急速に近づいていくのはやはり一九三九年のアメリカ亡命以後のことである。あらためて渡米以後のシュッツによるデューイの言及に着目すると、これまでさして注目されてこなかったことが不可思議に思えるほど、その言及の頻度は多い。著作のない年を除くとほぼ毎年、シュッツは執筆したいずれかの論文においてデューイの著作や概念を引いている。引用の論点を詳しく見てみると、この現象学者の関心は、はじめ『人間性と行為』(Dewey 1922)に代表される習慣的行為についての研究に向けられた後、そのジェームズ意識流概念に対する批判(Dewey 1940)を参照し、数年の後には「探究の理論」としてのデューイ論理学へと深くのめり込んでいく。「熟慮」、「確実性の探究」、「保証された言明可能性」といったデューイ哲学の主要概念に対するシュッツの注目は、一九四二年に親友グールヴィツチに宛てた彼の手紙のなかで、デューイの『論理学』を推薦するようになるまでには、<sup>(1)</sup>ほぼ論点として出揃っている(木村二〇〇四)。シュッツの高弟ネイタソンによれば「新たに主要な思想家を研究する場合、そのひとの諸著作にまったく没入してしまうのがシュツ

ツのやり方だった」というが(Webb 1976: 18)、シュッツが新世界アメリカにおける「主要な思想家」デューイについて、これだけの短期間に徹底した吟味を加えていったことが、この弟子の証言を裏付けている。

シュッツのデューイに対する関心の一端は、以上のことから窺い知ることが出来るが、論者はすでに、シュッツが、彼の主著の執筆に大きな影響を与えた旧友カウフマンなどを通じてデューイのプラグマティズムに引き寄せられていった詳細な経緯について、別のところで扱った。そこで明らかにされたのは、シュッツが科学と日常の世界のあいだの関係を「経験一般の構成原理」という視点から捉えるにあたって、デューイによる探究概念が彫琢された大著『論理学——探究の理論』から洞察を得ていたということであった(木村二〇〇四)。そこで、本稿では標題にあるとおり、このデューイの『論理学』をシュッツが具体的にはどのように読みこんでいたのか、そこに重視すべきいかなる論点を見出しただのかについて、もうすこし立ち入った議論を展開したい。

そこで資料として利用可能であるのが、シュッツによる直接の書き込みが見られる生前の蔵書である。現在ドイツ・コンスタンツ大学のシュッツ・アーカイヴに所蔵されているシュッツの蔵書には、シュッツ自身の書き込みを含むものが百冊ほどある。そのうち、デューイ『論理学』に残されている書き込みは、本文の抜粋や簡潔なメモがほとんどであるとはいえ、本文中に引かれた下線は全二十五章の

大半に及んでおり、シュッツがこの本を熟読した様子をはっきりと見て取れる。これらはいずれも、シュッツによるデューイの著作に対する忌憚のない評価と独自の読みとを明らかにする重要な手がかりになるものであるが、以下ではとりわけシュッツが余白に書き残した三つのコメント——「合理性と道理性」、「レシ皮的知識」、「フッサールの機会因的判断」——に着目して、論を進めていくことにしたい。

## 一、「道理性と合理性」

### ——デューイ論理学の基本動機

シュッツによる第一の書き込みを手がかりに、私たちは手始めにデューイ論理学の基本動機を明らかにすることができるだろう。デューイ論理学の基本動機とはすなわち「方法論と論理学の二元論」を前提とする伝統的哲学に対する彼の違和感である。

デューイのこの著書の副題にもあるとおり、彼は論理学を「探究の理論」として捉える。理論的な経験過程としての探究を取り扱う領域としてはすでに方法論が公認のものとなっているが、従来の理論枠組みによれば、探究の方法（手段）が意図された結果（目論み）へと至るための妥当性について論じる方法論は、その方法の客観性の規程こそを論理学に求めてきた。方法論はここでは論理学の応用に過ぎず、方法論に先立ってアプリアリな妥当性をもつとされる論理的要求こそが、探究と方法に対して、それらの外部から課される

シュッツはデューイ『論理学』をどう読んだか

客観的規準となるのである。

しかしデューイによれば、論理学が扱う確からしい論理形式（ないし推論の指導原理）はそれ自体、探究のうちで生成してくるものであって、アプリアリに決定可能なわけではない。さまざまな方法の試行錯誤にもとづいて、はじめて私たちはより「理に適った」方法を手にするのである。

シュッツはこうした文脈において「道理性ないし合理性」というデューイの言葉を抜粋している。というのも道理性（reasonability）ないし合理性とは、つくられた手段（方法）とその結果である結論のあいだの関係に関わっており、その手段―結果関係の吟味を通じて「なぜある方法が成功し、別の方法は失敗するのか」というその理由（reason）が明らかになる」からである。事実、合理的であることを「意図された結果を最大限の確からしさで生み出す手段を求めること」と定義するデューイは、以上のような論理学批判の基底において、合理性概念が伝統的に実体化されてきたことを問題視しているのである。論理形式の客観性によって方法論の妥当性を担保しようとする見解の根に、デューイは理性を第一原理に到達しうる能力として説く哲学のアプリアリズムを見抜いている。合理性はそうした見解によっては第一真理を知る能力ないし純粹知性として考えられ、探究の外にある論理形式として公理化されてきたのである。

デューイは伝統的哲学の定式に反して、合理性概念そのものを

「探究のプロセス」のうちに取り戻そうとした。意図された結果を最大限の確からしきで生み出す手段―結果関係の諸条件を定式化したものが合理的な論理形式であるとすれば、それはデュイイの可謬主義的な真理概念とともに、決してアプリアリには決定されないものとして再定位されることになる。たしかに、ある問いにおいて問われぬ前提として問いの背景をなしているのが論理形式であるのだから、論理的要請はたしかにその都度の探究に対する公準としてある。しかしそれはただ「未来の探究の結果、それを修正する理由が出てくるまで探究が満たすべき条件を課すもの」(Dewey, 1938: 112)なのであって、別の探究によって問われることを妨げない。そもそも論理形式の確からしき自体、以前の探究の結果見出された手段と目的の一定の結びつきにすぎない「保証された言明可能性」なのである。

こうしたプラグマティストの見解は、容易に私たちをある現象学的な洞察へと連れ出す。というのも問いの構造が問われぬもの存在を前提にするということこそ、フッサールは「地平」の概念を手がかりに明らかにしたからである。詳述する余裕はないが、シュッツはこの洞察を生活世界のレリヴァンス構造として追究したのであり、定式化された論理形式の妥当性がただ「さらなる気付きが生じるまで」のものにすぎぬことを、いたるところで強調したのである。ここには用語上の類似性にとどまらないプラグマティズムと現象学の親近性が垣間見えているが、私たちはさらに第二のメモへと

目を転じて議論を進めていくことにしたい。

### 三、「レシビ的知識」と習慣的な論理形式

デュイイ論理学の重要な洞察は、以上に見たように、あらゆる論理形式が探究の操作のなかで生じ、保証つきの言明を生むように探究をコントロールするものであるということである。こうした論理形式が現行の探究過程について反省することによって発見され明瞭になると主張するデュイイは、そこでパースの「推論の指導原理」概念を引き合いに出し、探究過程において指導的な役割を果たす論理形式の本質的な源泉である習慣の重要性について論じている。<sup>③</sup>

手段―結果関係は常識的経験においては習慣として結びついている。その場合、ルーティン的に実行されている推論を裏付ける論理形式、すなわち推論の指導原理は明示化されていない。パースが挙げ、デュイイが引証している事例に、次のようなものがある。回転する銅盤が磁石によって静止されるのを見た人は、別の銅盤も同じ条件のもとでは同じ動きをすると推論するようになる。なぜそうなるのかを説明する(この場合磁力等についての)一般命題、実際に推論が依拠しているその指導原理の明示的な定式化は必ずしもこの水準においては行われていない。

しかし「習慣は、定式化されて受け入れられる限り、行為の規則、あるいはもっと一般的に行為の原理または〈法則〉となる」

(Dewey 1938: 13)。デューイの見解によれば、推論の指導原理とはまずもって「推論の習慣」であり、日常的な行動を支配する規則や規範、法則など、さらに言えば伝統的な考えによってはア prioriに合理的だとされた論理形式一般は、もともととは習慣的な手段-結果関係を命題の形で明示したところに成立するものである。そうした命題の妥当性はしたがって、日常的な習慣によって決定される推論の信頼性に依存している。

シュッツが再びここで登場する。習慣に見出される推論の指導原理についてデューイが言及している箇所には、彼は「レシ皮的知識」というメモを残していた。想起すべきは、素朴に生活している人間が自然的社会的世界についてもっている習慣的な知識について、シュッツ自身がおこなった分析である。注目すべきことに彼のこの考察は、先に見た合理性の問題と不可分のものである。シュッツは習慣のうちに結晶化されている手段-結果関係のうちに、それ独自の「道理性」を見出しており、そうした認識にもとづいて彼はある種の科学主義的な想定を反駁しているのである。

レシ皮的知識ないし料理教則本的知識とは、教育や伝統、習慣、あるいは自分自身の以前の反省などから受ける多様な影響を通して、いわば自動的に利用可能な知識のことを指す。それは社会的に承認され、日常活動においては自明視されている。

「料理教則本には、材料の一覧表とその調合法、また仕上げの

シュッツはデューイ「論理学」をどう読んだか

ための手段といった調理法レピが示されている。これが、アップルパイをつくるのに必要なことのすべてであり、また、日常生活における型にはまったことがらに対処していくのに必要なことのすべてである。教則本にしたがって調理されたアップルパイをおいしく食べている場合、われわれは、教則本に示されている調理の仕方が、衛生学や栄養学の観点からみてもっともふさわしい方法であるのか否かとか、もっとも単時間で出来るか否かを経済的、あるいは効率的方法であるのか否かといったことを問うたりはしない。われわれはただ、そのアップルパイをおいしく食べるだけである。ベッドを抜け出してからベッドにつくまでのわれわれの日常的活動の大半は、この種の活動である。それらの諸活動は、自動的な習慣や疑問視されていない決まり文句に移し変えられる処理法にしたがって遂行されている」  
(Schutz 1964: 73f.)。

私たちは普通、みずからの日常的な行為を導いている「レシピ」について反省したりはせず、そうした命題の形であらわされるような論理形式を明示的に意識しているとは言いがたい。当面の状況下でしたがついているレシピが科学的に検証されているわけでもない。自明視されているレシピはしかし、それが一貫性をもたなかったり内在的に不明瞭であったりするにもかかわらず、当面の実践的諸問題の大部分を解決するのに用いられるには、十分に統合されており、

透明なものである。

ここでレシピ的知識について言われていることは、より一般的には、科学的知識と対照される常識的知識の特徴を示している。常識的知識は一貫的でなく混乱した状態にあり、かつその論理形式からみてまったく明晰判明ではないとしても、私たちはなお日常生活とそこに含まれる諸事物をそうした知識によって解釈しているのであり、それがたしかに日常的な習慣、伝統ないし特定の内集団に見られるある種のフォークウェイズなどによって組織化されているという意味では、それ特有の道理性を有しているとさえ言える。というのも日常生活における類型的な出来事（たとえば「翌日の朝には太陽が昇るであろう」とか、「もし私が正しい行き先のバスを選んで料金を支払えば、そのバスは私を事務所まで運んでくれるだろう」とかいうこと）は、推論の指導原理となっている論理形式（私たちは紛れもなく、その日常的な形態を「レシピ」と呼んでいる）や規則性それ自体の起源について知識をもたずとも、依然として同じく十分な理由をもってそのように予測することが可能であるからである。

習慣のうちに保持されている手段―結果関係はすくなくとも日常的な用語法においては十分道理的である。もちろん、シュッツがたとえば「よその」の分析 (Schutz 1944) などによって明らかにしたとおり、このことは習慣的知識の自明性が「破裂」し、私たちが「立ち止まって考える」ことがありうるということを否定する

ものではないし、そのような場合に私たちの習慣的知識が反省的思考によって、いわゆる *What* についての知識から *How* についての知識へと（すなわちジェームズに言われる「直接知」から「関する知識」へと）深められ、修正されることがありうるということを否定するものでもない。このことはしかもデュレイ自身が指摘しているように、科学的知識についてさえ当てはまる。習慣の道理性にせよ科学の合理性にせよ、経験的な探究の過程とは無関係な「純粋」で不可疑の「理性」に汲み尽くされることはないからである。

シュッツが習慣の道理性について以上のような議論を展開したのは、彼がシュンペーターとパーソンズの招きに応じて、はじめて英語でおこなった報告「社会的世界における合理性の問題」においてであった。前節の問題関心との結びつきを明確化するために若干敷衍するなら、シュッツはそこで、パーソンズによる合理性と道理性の定義（パーソンズ自身はこれらを区別していない）<sup>(6)</sup> が、ただ理論的なレヴェルに関わるかぎりにおいてのみ正しいものであるということを主張していた。

パーソンズの解釈に従えば、「合理的」というのは「論理的」ということと結びついている。しかしながらシュッツによれば、「伝統的な形式のもとにある論理学は、日常経験のレヴェルにおいては、われわれが必要とし、また期待しているような役にはたかえない」。なぜなら「伝統的論理学はたとえば諸概念の明晰・判明性という公準を力説するなかで、思惟の流れの核を取り囲んでいる縁暈をこと

ごとく見落としてしまう」が、「日常生活における思惟は、まさしくそうした核に付随している諸々の縁暈と思考者の実際の状況との関係に主たる関心を向けている」からである。シュッツにとってむしろ重要であるのは、パーソンズが焦点化している理論的なレヴェルについて、それを社会的世界についての私たちの経験がもつ別のレヴェルと対照することによって、その特異性を明らかにすることであった。

シュッツが、行為者のプラグマティックなレヴェルが問題になっている限りにおいて、パーソンズの合理性概念に修正を要求したのは、恐らくデュリーの『論理学』を知る以前のことであったが、彼の主張はまさに、論理学と方法論のあいだの二元論的な想定を批判する視点から合理性の問題を論じたデュリーの議論を先取りして言いついてある。

#### 四. 日常思考の論理学

##### ——「機会因的判断」について

シュッツ自身による書き込みにしたがって、私たちはこれまでデュリー論理学の基本動機と習慣的知識の道理性について確認してきた。私たちは最後のメモ、すなわち「フッサールの機会因的判断」が意味しているシュッツの読みについても、それらと同列の文脈において解釈することができる。

「機会因的判断」という用語は、デュリーが常識的な探究と科学

シュッツはデュリー『論理学』をどう読んだか

的探究というふたつの探究様式を区別している頁(p.115)、また指示代名詞「あれ (es ist)」の意味がその文脈的状况によって規定されることを明らかにしている頁(p.242)の余白に、それぞれ走り書きされているが、フッサール自身は『論理学研究』の第一研究「表現と意味」において、「本質的に機会因的な表現」を数学的なそれによって代表されるような客観的表現から区別している。

「われわれは次のような表現をすべて本質的に主観的かつ機会因的、ないしは簡潔に本質的に機会因的と呼ぶのである。すなわち、概念的・統一的な一群の意味を包含していて、その時々機会にに応じて、つまり話し手とその状況に応じて、その都度の顕在の意味を方向づけねばならないような表現をすべてそう呼ぶのである。この場合聞き手にとっては、表明の実際上の事情を顧慮してはじめて、もろもろの共属する意味のなかで、ある特定の意味がそもそも構成されるのである」(Husserl 1970: 315)。

「人称代名詞を含んでいるすべての表現は、すでに客観的意味を失って」おり (ibid.)、人称代名詞について言われることは、「あれ」・「ここ」・「昨日」などによって例示されるすべての指示代名詞についても当てはまる (ibid.: 89)。さらにこの本質的に機会因的な性格は、「話し手が何か自分自身に関わりのあること、ないしは自分

自身との関係によって思惟されたこと」を、たとえば定冠詞を用いることによって正常に表現する場合の、「多種多様な一切の表現形式に転嫁される」(ibid.: 91)。

フッサールによれば、「本質的に機会因的な表現と客観的表現との区別は、それとは別の、しかも同時に多義性の新しい諸形式を表す諸区別」、たとえば表現の不完全さや非正常性、曖昧さなど「交錯して」おり、機会因的な性格は、これら表現の多義性によって増大するという (ibid.: 92)。たしかに機会因的な意味は、「理念的に言えば」客観的な表現によって「昨日」ではなく「一九七六年十月十七日」というように置き換え可能であるが、「そのような置き換えはただ単に実用的な理由から、たとえばその煩雑さのゆえに行われただけではなく、大抵の場合には事実上遂行不可能である」(ibid.: 96)。事実、類型的でそれゆえ機会因的な表現はその正確な意味内容を省略しており、その意味で「欠如的」であるが、それらはそれにもかかわらずなお、話し手と聞き手が居合わせている直観的な状況によって補われることによって十分に理解可能である。

前節で示したように、私たちの知識の集積は自明視された世界についての日常的な経験において、論理的な主題や述語をともなった判断ないし命題の定式化なしに成立している。習慣的な知識にも仮説と帰納、予言が欠けているわけではないが、そこにはきわめて異質な種類の知識が齊一性を欠いた混乱した状態で包摂されており、

それらはすべて近似的なものとか類型的なものといった性格を帯びている。そして私たちが照準をあわせるべきことは、にもかかわらず、それらがみずからの生活を掌握するという当面の実際的な関心にとって「十分である」という事実である。シュッツが疑いなくデューイを意識して解説しているとおり、「日常的知識が理想とするのは確実性ではなく、ましてや数学的な意味での蓋然性でもなく、まさしく見込みを理想としている」のである。

## 五. 結論

私たちは第一に「道理性ないし合理性」という書き込みを鍵に、デューイ論理学の基本動機を確認した。デューイは伝統的哲学の定式に抗して、合理性概念を経験的な探究のプロセスのうちに取り戻した。「意図された結果」を最大限の確からしさで生み出す諸条件を定式化したものが論理形式であるなら、それは絶えず進歩しつづけるものであり、アプリオリには決定されない。

第二の鍵はこの合理性概念の日常的な形態と関わりをもつ「レシ皮的知識」であった。日常生活において「レシピ」のごとく推論の指導原理として働いている論理形式は、日常生活者によって自明視されているが、それ特有の道理性を有している。シュッツがデューイの論理学において最も注目したのは、そこでは論理の働きというもの、その形式は明瞭に定式化されていないとはいえず、すでに科



学的探究に先立つ「常識的探究」において見出されているということであった。

この点をさらに掘り下げて見るために、私たちはシュッツとともにフッサールの「機会因的判断」という術語に注目した。シュッツは彼の一般社会学を確立するために重要と見た「日常思考の論理学」を、彼が礎石としたヴェーバー、フッサールの伝統のうえに、さらにプラグマティストの洞察を援用して構想していた。日常的な思考はすなわち彼がデューイの探究概念をもって表現するとおり、機会因的な「見込み」の探究として特徴づけられるのである。

機会因的な「見込み」とは、つねに「さらなる気付きが生じるまで」の確実性としてある。それはシュッツの言葉で言えば、当面の関心においては問題視されていない自明視された知識の確実性であり、デューイの言葉で言えば、可謬的な「保証された言明可能性」の確実性である。従来の論理学の前提を覆し、論理の働きを未規定の状況から保証された言明可能性に至る探究の過程として分析したデューイの名著『論理学』を読み込みながら、シュッツはこのように私たちの生活の機会因的でプラグマティックな条件について考察していた。日常的な推論の道理性、ひいては生活世界それ自体の自明性もまたそれによって担保されていると言える。シュッツはこうした考察を通じて、私たちの日常生活の論理とその道理性を捉えなおし、現象学とプラグマティズムというまったく独自の哲学的伝統をもつ思想的潮流のあいだに對話を可能にするひとつの暫定協定を

シュッツはデューイ『論理学』をどう読んだか

提示したのである。

注

- (1) Schütz & Gurwitsch 1985: 103 (Brief am 1. March, 1942). シュッツはまた一九四一年九月にニュースクールで開催された「哲学と科学の方法に関する会議」に参加した際も、デューイによる報告に感銘を受け、親友にそのことを報告している。(ibid.: 94, Brief am 24. November 1941)。
- (2) 事実、シュッツがデューイ『論理学』に記したマークとメモのうち、もっとも頻出のものは、このレリヴァンス概念に関するものであった。
- (3) シュッツ自身は公刊された著作のなかでは一度もパースについて言及をしていないが、直観の能力を否定するパースのシンボル理論について、彼はきわめて詳細なノートを作成していた (Schütz, o.J.)。
- (4) シュッツはこの「破裂」というフッサールの術語をも『論理学』に記している (p.253)。cf. Husserl 1950: sec.138
- (5) James 1918: 221. シュッツは、デューイ自身がこの概念を解釈している箇所を下線によって強調している (Dewey 1938: p.151)。
- (6) 「行為が合理的であるのは、それが、状況の諸条件のなかで可能な目的を追求し、行為者に入手可能な手段のうちで、実証的で経験的な科学によって検証され理解可能な理由にもとづいて、目的にとって内在的にもっとも適当な手段を用いる限りにおろつてである」(Parsons 1937: 58)。

引用文献・資料

- Dewey, John, 1922, *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology*, Henry Holt & Co.
- , 1938, *Logic: The Theory of Inquiry*, Henry Holt & Co.
- , 1940, "The Vanishing Subject in the Psychology of James", later

- published in Dewey, 1946, *Problems of Men*, Philosophical Library
- Husserl, Edmund, 1970, *Logical Investigations*, vol.1, Routledge & Kegan Paul
- James, William, 1918, *The Principles of Psychology*, vol.2, Dover
- 木村正人、二〇〇四、「類型化と探究——シマモンゴによるチノーイ探究概念の批判的考察」『社会学年誌』第四十五号、早稲田社会学会
- Parsons, Talcott, 1949, *The Structure of Social Action: A study in social theory with special reference to a group of recent European writers*, Vol.1, Free Press
- Schutz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Julius Springer Verlag (佐藤喜一訳、一九八二『社会的世界の意味構成——チノーイ社会学の現象学的分析』木鐸社)
- Schutz, Alfred, 1944, "The Stranger: An Essay in Social Psychology", in: Schutz 1964
- , 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff (渡部光・那須善・西原和久訳、一九九一『アルノレン・シマン著作集 第三巻 社会学論の研究』マルニ社)
- , o.J., "Charles S. Peirce", unpublished material housed by the Schutz Archive at Waseda University
- Schutz, A. & Gurwitsch, A., 1985, *Briefwechsel 1939-1959*, Wilhelm Fink Verlag
- Wagner, Helmut, o.J., "Wagners Dokument", unpublished material housed by the Schutz Archive at Waseda University
- Webb, Rodman B., 1976, *The Presence of the Past: John Dewey and Alfred Schutz on the Genesis and Organization of Experience*, U. P. Florida